

## 令和2年度 国文学科 一般推薦試験講評

### 1 出典

安藤宏 高田祐彦 渡部泰明著『日本文学の表現機構』（岩波書店、2014）による

### 2 出題意図

文章の読解力と古典についての基礎知識、漢字についての基礎的素養を問うとともに、文章読解をもとに、自分の見方・考え方を的確に文章化できるかを問う。

### 3 採点基準

文章を的確に読解し、理解しているか、古文についての基礎的な知識と理解があるか、設問に適切に答えているかが採点の基準となる。

小論文については、課題文の内容を、ここでの「逆流」の意味をきちんと押さえた上で把握できているか、これまでに学んだ具体的な知識と結びつけて具体例や自身の体験を挙げているか、自分の主張を論理的に記述できているかを主な採点基準とした。

### 4 採点講評

問一 漢字の読み書きの問題。

全体的にはよくできていた。ただ、「唐突」の書き取りの正解率が低かった。読みでは「一顧」を間違えている答案が多かった。漢字の読みと書き取りは毎年必ず出題される。日頃の読書を通じて語彙を増やしておくとともに、問題演習を十分に行って、試験に臨んでいただきたい。

問二 動詞をすべて抜き出し、終止形・活用の種類・活用形を書く問題。

正答率は高かったものの、「た（立）て」をタ行下二段活用・連用形としたり、「き（聞）く」の活用形を終止形とした答案が多く見られた。また、「ぬ（濡）る」の活用の種類を、ラ行ではなく、ナ行の下二段活用とした誤答も複数見られた。

基礎的文法問題に正確に答えることができるように、日ごろから古文に慣れ親しんでおくことが大切である。

問三 本文について、指示的内容に関わる、40字前後の説明問題。

まず、「因果律」と「限界」のそれぞれについて、適切に説明することが求められるが、どちらか一方の説明にとどまっている答案が目についた。「因果律」については、「原因」「理由」と「結果」の語を用いて示すのがよいであろう。また、ここでは「感動」や「美的体験」を言語化するにあたっての「限界」であることをはっきりさせる必要がある。おおかたの答案で趣旨はとらえられていて、記述の充実度に応じ

て、半分くらいの点から満点までに分かれることとなった。

#### 問四 本文について、内容の理解に関わる、40字前後の説明問題。

「固定観念の解体」という要素と、「それ以外のことのほうが重要」という要素の二つが必要である。傍線部を含む段落に着目することが基本になるが、論じられている内容において次の段落も連続性を持っていることを見落とさずに読み解くことができたかどうかで差がついた。

傍線部の直前の「しかし」で始まる文の中に「盛りの花、隈なき月はそれほど重要ではない。」とあることを踏まえれば、「対象となるもの」を「それほど重要ではない」とすることが、「のみ……ものかは」という語法による「相対化」の働きであることがわかる。ただし、「「……のみ……ものかは」の、和歌の用例を見てみよう。」で始まる次の段落において、「相対化してしまう語勢」についてさらに詳しく説明されている点に注意したい。そういう段落展開に気づくことができれば、3ページの後半に「つまり「……のみ……ものかは」の文脈は、「……」で示された事柄を、かりそめのもの、あまり重要でないものとして、相対化してしまう。」という一文を見つけられるはずである。もちろんこの一文は、「相対化」という単語に注目することによっても、見つけ出すことが可能である。

さらに言えば、すぐその次の一文が段落の締めくくりの文になっていて、「～のである。」という文末表現であることに着目すれば、傍線部を説明する上で、「盛花や名月を見ること以上に大事なことへと、読み手の意識を誘い込もうとする勢い」という叙述を参照すべきであることがわかるだろう。「盛花や名月」はもちろん、「勢い」という言葉は、傍線部の「語勢」と照応する単語である。

なお、「相対化～語勢」について「どのように」と問われているのだから、「相対化する」という単語で説明しただけでは同義反復（トートロジー）になってしまい、説明にはならない。

#### 問五 小論文

本文は美についての固定観念が作られてゆく様子と、それに対して、兼好が通念化された美意識を「逆流」させようとする意識をもっていることを示しているが、それは単に美意識の多様性を評価することなのではなく、(それでは何でもアリ、になってしまう)、通念への抵抗であり、新しい挑戦であると言うことまで言及して欲しかった。

本文中の「逆流」の意味を捉え損ね、ただ、視点を変えることの重要性を主張しただけの答案が多かった。著者は、兼好の態度を発想の転換というレベルではなく、ものを語る「文体」のレベルで読み取り、それを論じている。『徒然草』の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」に、満開の桜、満月こそ美しいとする通念的・通俗的な理解を転倒させ、美の基準の問い直しをも迫る「文体」の強度を見ているわ

けであるから、暗黙の前提としていた価値基準がどのように揺らがされたのか、という点にまで論及する解答でなければならない。そのような解答が少なかったことは残念であった。

また、挙げられている事例や体験の多くが通念的・通俗的で、小論文ならぬ単なる作文にしかすぎない答案が多かった。課題文にある、通念的思考を論理的に「逆流する」ということの意味を極めて平板にとらえ、同調圧力に逆らったことがある、という程度の体験談を語っている作文が大半であった。一方、あえて課題文と反対の主張をするためなのか、通念的思考を「良識」や「伝統美」と読み替え、それを守ることの方が大切だと述べるものもあったが、課題文は思考の運動やその過程の大切さについて述べているので、その点を汲み損ねた解答はやはり得点が抑えられる。自由型記述とは違うので、課題文の読解をより大切にすること、強度のある解答を可能にする強度のある事例・体験を選ぶことが求められる。